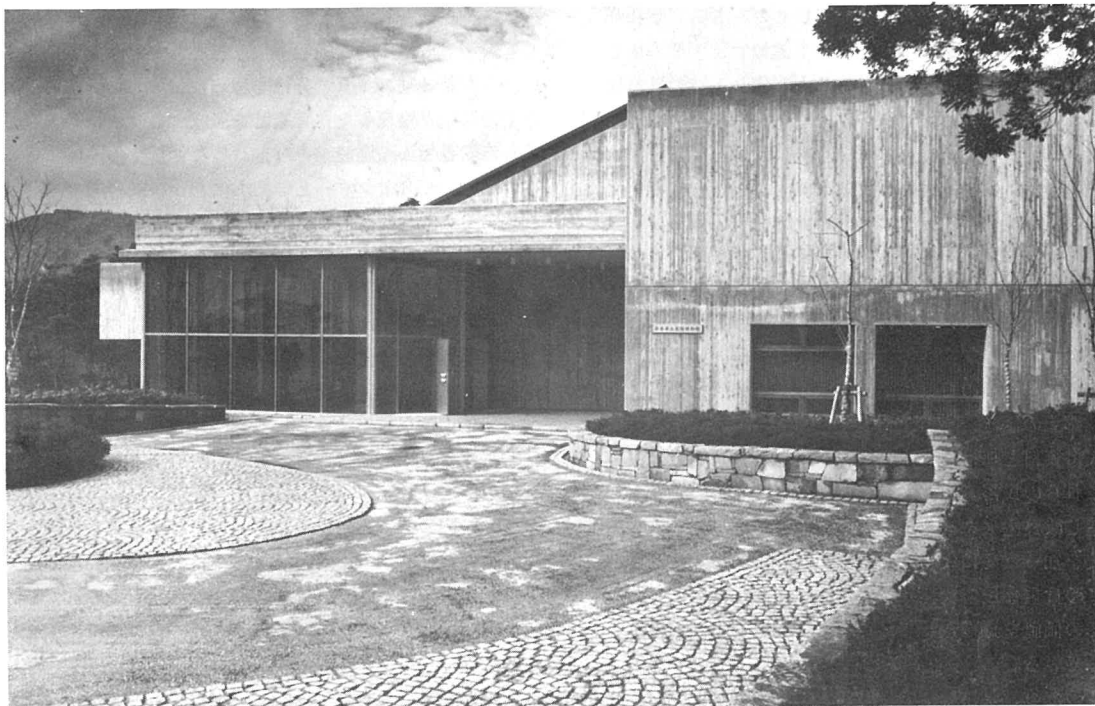


民俗博物館だより

Vol. I No. 1

1975. 1. 25



玄関前広場より

創刊号

目次

開館にあたって.....	2
奈良県立民俗博物館の展示.....	3
収蔵資料の紹介（収穫の用具と儀礼）.....	5
奈良県の民俗行事（正月行事）.....	6
第一回体験学習講座と民俗講座.....	7
おしらせ.....	8

開館にあたって

本県北部にあって近世の城下町としてその歴史的風土を遺す大和郡山市の郊外、矢田丘陵一帯は古くは平城京の一角に接して万葉集にも八田乃野の名でその風光をうたわれた地である。このあたりは都市近郊とはいえ未だに昔の自然のおもかげを遺しているが、ここに昭和48年度より県立大和民俗公園の建設を進め、まずその中心的施設としてこの県立民俗博物館が完成し、昨年11月10日開館した。

「大和は国のまほろば」とうたわれたように奈良県は、わが国古代文化の発祥の地として永い歴史の中で華やかな古代文化や独特の郷土文化を育み、今日、これにまつわる貴重な文化財を数多く遺している。

一方、この華やかな歴史の蔭に黙々とその文化を担ってきた庶民の日々の営みのあったことを忘れることはできない。

これらの庶民の日常生活の中で育まれてきた生活文化は、郷土の伝統、風俗、習慣などの形で伝承され、数々の民俗資料と呼ばれる生活文化財を遺している。

これらの民俗資料は、私たちの祖先が生活の必要から創造し改良工夫をこらしてきた生活体験の結晶で生活の歴史を知るうえに欠くことのできないものである。

この貴重な民俗資料が時代の趨勢とともに文化遺産としての価値を認識されないままに永遠にその姿を消そうとしている。

このため、県において、これらの民俗資料をできるだけ収集保存して永く後世に伝えるとともに、県民が民俗資料をととして先人の生活を追体験し、郷土の伝統、風俗、習慣などに対する理解と認識を深め、生活文化の向上に資するようこの県立民俗博物館が設立された。

当館の規模は、延床面積 4,250平方メートル、建築工費約5億2千万円、鉄筋コンクリート造り、地下1階、地上2階建てアカマツ林におおわれたなだらかな丘陵を背景に近代的な、しかも周囲の自然環境に調和したしょう洒な佇まいである。

内部は、1階が展示及び管理部門2階は研究普及部門地下は収蔵部門のそれぞれ各室からなり、展示室は観覧しやすく、かつ、管理面の配慮から1階に集中し、自由な展示構成ができる広い構造である。また、展示室について、郷土学習室を設け実習、実演をととして民俗資料に直接ふれあう実験的試みをしている。

2階は、講義室（100人収容）をはじめ図書室、研究室、写場、録音室、資料登録整理室など館の研究活動とその普及の場としている。

地階は収蔵部門として、一般収蔵庫2室のほか恒温湿の特別収蔵庫をもち、さらに荷解室、未整理、補修工作

室、くんじょう室などを設けている。

館内施設はいずれも機能的な博物館活動とその将来の展望にたって十分なスペースをとっている。

当民俗博物館は、知事の民俗資料保存の提唱にそってたてられた大和民俗公園建設基本計画にもとづくものであって、この民俗公園と一体のものであり、また、郷土博物館としての特色をもつものである。

まずこの大和民俗公園は、26万平方メートルに及ぶ広大な自然緑地を敷地として、園内には当民俗博物館を中心施設として県下の代表的古民家をそれぞれの立地条件に合った地域別の集落に分けて移築し、その特性に応じた生活環境を再現した民家集落を形成するほか、県民が親しめる各種公園施設を取り入れるなど郷土の民俗文化についての総合センターとして、また、県民の憩いの場として、これら諸施設を有機的に組合せて公園全体を一つの大きな野外博物館としての性格をもつユニークな公園とするもので昭和52年度完成を目途に建設を進めている。

つぎに当館は、郷土の民俗文化を専門的にまた、総合的に扱う博物館である。このことは本県の文化の伝統と歴史にもとづく文化財行政の特質を表わすもので県立考古博物館、県立美術館、そしてこの県立民俗博物館とそれぞれ専門分野が確立された本県独特の博物館体系を形成している。したがって、当館は、民俗分野の研究と普及の場として大いに斯界の期待を担うものである。

さらに当館所蔵の民俗資料は現在約 7,500点に及ぶがすべて県下全域の県民の無償提出によるものであって本県の土地柄からする文化財保存に関心の高い県民性を示している。このことから当館は名実ともに県民によってつくられた郷土博物館といえよう。

当館の資料展示は、県民が民俗資料をととして先人の生活文化の伝承を理解し認識するための合目的性と民俗資料の特殊性をふまえて、わかりやすく興味深い展示としよう心掛けている。一例として本県の地理的特性にもとづく民俗性を鮮明に表現する意図から展示テーマとして地域別に生業をとりあげ大和盆地の稲作、吉野山地の山の仕事、大和高原の茶業など、それぞれテーマごとにコーナーを設けて生活と民具のかかわりを生業をととして表現している。

民具の一つ一つに象徴されるものは、私たちの先人がきびしい生活を闘いぬいてきたたくましい姿であり、伝統的な生活の心である。これを展示の中で如何に具象化するかが民俗資料展示の課題であらう。

当館は、開館後未だ日が浅く博物館活動も試行の域を出ないが今後県民の御協力と先輩諸氏の御指導によって最近、民俗研究に対する一般の関心がとみに高まりつつある中で当民俗博物館が郷土の民俗文化の正しい伝承をうながし、さらにわが国の民俗研究の一里塚ともなればと願うものである。

（県立民俗博物館長 川内一郎記）

奈良県立

民俗博物館の展示

1, はじめに

博物館の展示はかならず入館者を意識したものでなければならない。

それは、地域社会の人々（奈良県民）の文化向上に寄与するため誕生した、奈良県立民俗博物館の展示姿勢として当然のことといえよう。文化向上に寄与するためには、資料の保存、要するに文化財保護の観点に加え、一般公衆の社会教育の場という認識のもとに活動する必要がある。

さて、展示という語は、辞書では、「品物を並べて一般の人々に見せること」としているが、博物館の展示という概念を考察するためには、これまでの博物館学研究の成果に寄らねばならない。この研究は、国際的な場では ICOM（国際博物館会議）、また日本でも明治以降雑誌『博物館研究』等によって、科学的展示法が検討されてきたが、学界での成果は、陳列と展示をはっきり区別したことにある。



展示場入口付近

つまり収集された資料がいくら学術的に研究されていようとも、何らかの目的や意図のない、もの（資料）の羅列的配置の陳列では観覧者の理解はむずかしいということである。要するに陳列は大衆の自由な意志で利用されるべき博物館が、古物の「博物館いき」ということばで表現されるような、陰気なイメージをあたえることになる。

博物館の展示をよりよきものにするには、学術的研究以外に、展示法の面での考察、つまり、社会学、教育学等の他分野からの科学的分析が必要となってくる。展示に対する社会の人々の意向をくみとるため社会学の応用また教育的効果を上げるため教育学の応用。それらによって多様化する現代社会の問題解決のためにある博物館展示がより充実したものとなることだろう。

2, 当館の展示法

昭和46年より約3年半にわたって収集された民具は、7464点（昭和49年11月10日現在）にもおよぶが、それをもとにして展示企画をしたことはいうまでもない。そして、前述したとおり、それらの民具を雑然と陳列するのではなく、有機的に展示することを前提として考えた。要するに、もの（資料）をもって1つのテーマ（物語り）に組み上げ、観覧者に説得力あるものにした。

オープン展示は、常設展示であるが、民俗文化（我々の祖先がくりかえしくりかえし伝承してきて、現在の私どもにも伝えられた現象や心意）の本質を考察するものである。従って、もの（資料）を使用して具体的に民俗的事象を展示場で再現しなければならない。しかし限られた展示スペースのなかではその民俗文化の一面を提示することに留まることはまぬがれないので、その本質の認識をより完全なものとするため、年2・3回特別展示で補足するつもりである。

ゆえに、常設展示は、特別テーマ展示の基礎であり、入門の意味もなければならない。

断片的な小テーマにわたる、総花的展示法では結局観覧者の展示内容について理解が行きとどかないことが多いため、当館の常設展示は、二つの大テーマで企画した。

その一つは生業をテーマにした。地域別によって民俗性を考察すると、くらしを律してきた生業が展示テーマとして適当であるという結論になった。そこで、地理学上で公称される分け方ではないが、ふるくから奈良県に住む人々が呼びならわしてきた、国中（奈良盆地）・東山中（大和高原）・吉野山地の3地域の代表的生業である、稲作・茶業・林業の様子を展示した。

前述したとおり、特別テーマ展示で、もし「田の神」「山の神」を取り上げた場合、人々のたゆみない努力によ



稲作コーナー「白ひき」

ってなされた農事作業や、危険にさらされながら従事した山の仕事の内容を理解してこそ、信仰心のいみをわかつことができる。そういうことから生業のテーマは、妥当といえよう。

もう一つのテーマは「日々の暮らし」をとり上げた。ここでは、日々の人々のいとなみのなかの衣・食・儀礼等の面で変貌する現代の暮らしとの対比を強調した。

以上が展示テーマの設定の経過と理由である。次に展示設計について具体的な案を作成するのにディスプレイ専門家と協議を行った。

今日のデザイン学のなかのディスプレイ分野では、商業空間（百貨店、ビジネスショウ、商品展示会、舞台装置等）と社会空間（児童館、天文台、図書館、資料館等）に対象を区別している。博物館は、後者の領域に入る。ディスプレイは展示の理解を観覧者に鮮明にさせる手段であるが、いたずらに造形感覚や流行にたよるものでない。

また、人間工学的な面からの考察も展示立案には必要である。卑近な例が、最良の視覚範囲はどれほどかという人間の生理的なことのデータも重要になってくる。

私どもは、建築家に1つの提案をおこなった。展示場を小部屋分割の形式をとらずに、一つの空間にすることを要望した。それは、今後の展示替え（既存展示・将来の特別テーマ展示）の際、スペース取りを自由にするためである。

その主旨にそって展示の備品諸整備も固定化せずにフレキシブルなものとした。原則として、背面パネル1枚に1台の展示ステージをつけてユニット化し、その組み合わせで展示設計を考えた。

また、半ジオラマ化した生態展示の部分においても移動可能な方法を採用した。その場面には人形を配しているが、人形の頭、手、足、腰の関節、背中も自由自在にうごき、人間の複雑な動きをほぼとらえられるように考えた。また、若い女性（茶つみの状況展示にある人形）のすがたが、頭をとりかえることによって老姿（すでに老姿の顔した頭を在庫している）にもなるように工夫した。

今日は映像時代と呼ばれるぐらい、テレビ等の家庭へ

の浸透と、それから受ける影響はまことに大きい。今日、時間、空間をうめる情報はあふれるぐらい私どもにあたえられている。しかし、映像は、そのうちの1コマに興味を持とうとしても瞬時しかみることができない。それにひきかえ展示の場合は映像ほど強烈さはないが、観覧者に時間と事柄の選択をあたえる。

だが、映像の長所である提供者自身の意図を直接的伝達できる効果は魅力あるものである。本展示でも3面オートスライドによって、県内各地のさまざまな民家のすがたと、それをとりまく生活環境のようすを紹介した。

以上が展示室の概観であるが、展示室に隣接する郷土学習室は近年開館される博物館でこころみられつつある追体験の場とした。

展示ではその限界といえようか、ものを視覚にうたえて理解させるまでであるが、この場で、反復によって理解をより完全なものとする。開館より2週間目の休日に、民具製作実習として「なわなひ」をおこなったが、午前、午後の2回に100名近くの参加者があり、好評であった。また、展示物の7割は露出展示で人ともとの接近感をもたせているものの危険（刃物等）、盗難等の関係上、手にとつてもものに触れることができないため、一部の資料を実際に使用してみる場にも活用している。

郷土学習室は、もう一つの活用がある。それは、奈良県の民俗文化に関する論文、報告の類を開閉台にファイルし、県内外の学者、学徒にも閲覧してもらう。余り中央でみられない県下の郷土史家の研究報告も収録するつもりである。また、以前開催した特別テーマ展示の内容も常備しておく。

3、まとめ

以上が当博物館の展示理念と実施内容であるが、どの場でもいかに来覧者に理解してもらうかという難問の解決に努力してきたことは申すまでもない。

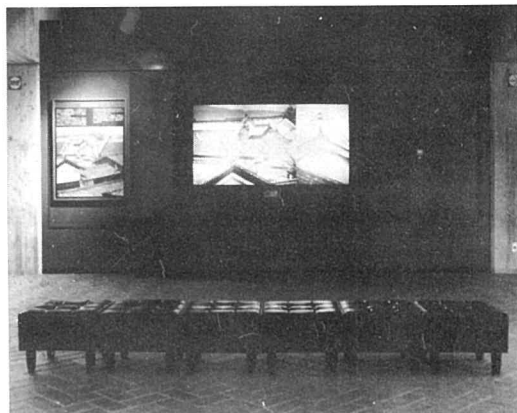
今後の展示活動でもその考え方はかわらないと思う。

最後ではあるが、審議会委員・地元調査員ならびに一般県民の方々の御指導、御助力に深く感謝する。

（芳井敬郎記）



ユニット式の展示台とパネル



三面マルチオートスライド

収蔵資料の紹介

— 収穫の用具と儀礼 —

(1)

彼岸花が畦を埋め尽くす頃、稲穂もようやく出そろい、色づき始める。しかし、稲穂が出そろえばシシやスズメ等の鳥獣が田畑を荒らすので、シシガキを設けたり、カガシを立てて農作物を守らなければならなかった。カガシは鳥獣除けに欠かせぬものであったが、室生村では人形その他、犬やイノシシ、蛇を形取ったものを立てた。

稲刈がすむとカガシを担いで帰り、亥の子餅や白御飯を供えて礼を言う所があった(室生村、五条市)。長野県などでは10月10日をカカシアゲといって、田からカガシを持って来て庭先の清浄な所を選んで立てかけ、焼餅を2つ樹に入れ、ネジリサングアラの上に乘せて供えていたというから何か相通ずるものがあるのだろう。また、村によってはこの日をカガシの神の還る日、出雲の神が山へ還る日などと言っている。奈良県でも10月28日、あるいは晦日をカミガエリといってムラ中で宮ゴモリする所がある。山添村毛原のそれは亥の子の行事と結びついており、10月28日を氏神が出雲から還って来る日とも、亥の子の日とも言い、クルミ餅を作ったそうである。また、伏拝では霜月の亥の日にザクロを白の中に入れて特に暗い所に祀り、亥神を縁結びの神と言った。亥の子は亥神様を祀る行事で、多くは10月の初亥の日にした。所によって芋入りのボタモチやクルミ餅を作り、この日は一日仕事を休んだ。また、桜井市高田では鍬や鎌の模型を亥子神に供えたという。出雲信仰と習合もしているが、カガシも亥神も実は田の神であり、春に山などから降りて来た田の神が稲刈が済むと伴に田を引き上げるに当たって、村人はこんな行事をとり行なったのである。

稲刈は稲のアカミかげんを見、都合の良い日を見計らって行なった。稲刈には鎌を用いた。鎌は用途によってハガマやノコギリガマなど大小いろいろあった。

ノコギリガマは刃に刻みを入れ、ハガマの滑りを防ぐために考案されたもので、使用され始めてからさほど時を経ていない。ノコギリガマは曲りが無く使い易いといい、随分と重宝がられたが、普通の鎌のように砥ぐことも出来ず、一、二度使うと捨てなければならなかった。稲刈が済むとカマオサメあるいはカリオサメと称して稲刈に使った鎌を洗って箕の中に入れ、赤飯や大根飯、ボタモチ、粥等を供えて祀ることがほとんどの地域で行なわれた。鎌だけでなく、稲コキが済めばカナゴキ収めといい、白挽が済めば白収めといって同じように供え物をして祀る所もあった(五条市、西吉野村、高取町、都祁村、山添村等)。

稲刈に先だち、田の水口に竹で鳥居形のものを作って稲穂をかけるホガケが都祁村(小倉、上深川)や室生村で行なわれていた。都祁村では一番先に鎌を入れる田の

1株を刈って、田の水口に長さ1メートルの竹でアーチ形のものを作り、これに計24本(閏年は26本)の穂を2本ずつ抱き合せ、12束(閏年は13束)の稲穂を並べて掛けた。室生村では5・6本の稲を束にして計12束の稲穂をかけ、多田ではこのホガケを稲コキまで立てておいた。また小原、上笠間等では刈り始めの穂はそのまま家の神さんに供えたという(近畿の宮座組織で氏神の秋祭を行なう所では、ホガケが行事の中心になっているという)。このホガケは都祁村では秋の社日に、室生村では10月の始めにしていた。古くは八朔に行なっていたらしく「八朔のホカケ」といった。カマオサメ、亥の子の行事等と並んで収穫儀礼の一連をなすもので、その最初の行事であったと思われる。

刈った稲は古くはフリボシといって束ねて一把ずつ広げて地面に立てておいた。そこを稲場といい、耕地のところどころが芝生になっていた。ところがこの稲場はハザの普及ですっかり不要になってしまった。ハザの形を全国的に眺めてみると、表日本には平架が多く、裏日本の深雪地域には段架が分布している。また酒田、鶴岡を中心とした東北地方では、2メートル余りの棒に紡錘形に稲束をかける杭干という方法がとられている。この杭干は簡便なため、近年流行したらしい。段架は作業能率こそ悪いが、穂の乾きが早いことから、積雪以前に調整する必要がある裏日本でこれが採用されたのであろう。奈良県吉野地方では段架が一般的であり、ここでは主にトウキビ、大根、麦等が棚を飾っている。気候条件もさることながら、谷間や斜面の狭い土地を合理的に使用するには段架が最も都合良かったのである。平坦、東山中ではほとんどが平架で、高取町付近では段架をタナハザ、平架をウマハザと称し、両方見られる。約1〜2週間干して脱穀に取りかかった。ハザは古く平安時代からあった。承和8年(841年)に大和宇陀郡の百姓が、田の中に木架を講えて刈稲を架干にし、それを稲機と称していたとある。しかし、ハザの普及はずっと下って、元禄の頃稲穂の乾燥度を要する千歯扱きの普及に伴って急速に広まった。

そのカナゴキ(千歯扱きともいう)であるが、板状もしくは丸い歯を木ではさみ、その木にホゾをあけて4本の足をつけ、縄をたらして踏み台を置いたもので、体重をかけて動かないようにし、歯と歯の間に穂を入れて思い切り引っ張る。歯は鉄製、竹製と二様ある。麦用のものは歯が短かく、歯の間隔が少し広い。千歯扱きとは一時に千把扱けるから、また歯を多く持つことからの命名らしいが、ゴケダオシとの異名を持つ。一説によると、かつては後家さんが質嫁ぎに脱穀の仕事をしていたが、そ

れを奪ってしまったからだという。一時に千把というが、一人一日15ソク（20株を1把、12把を1ソクという）扱くのがせいぜいであった。下北山村では千歯扱きのことを**タカセ**という。熊本県玉名郡では竹製のセンバをタカセンバと呼んでいる。竹センバの意味だという。下北山のそれは鉄製だが、タカセがタカセンバと同義だとすれば、竹製の方が古いことになる。足など全く無く、細長い板を膝で踏んで扱く**タカセ**（竹製）がある。これは豆用に使われた。千歯扱き以前は裂いた竹を手を持ち、その間に穂を入れて扱いだと文献に記されているが、それと同じものは豆を扱くのについ先頃まで使われていたようで、**コキバシ**あるいは**マメコキ**と称していた。大正の頃になるとカナゴキに代わって足踏脱穀機が登場した。これだと一日30ソク脱穀出来たという。

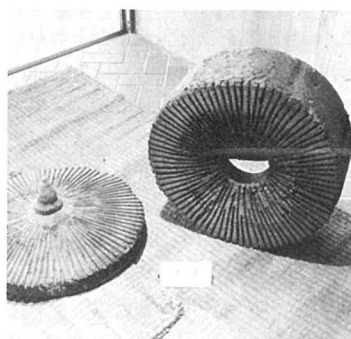
脱穀した後、2・3日カドボシしてから臼で挽く。曾

爾村当りでは「アーア、臼は3人シモクは5人よ、トシ、トドシはわしゃ1人よ、臼よ回れよシシトロトロと……」などと歌いながら挽き、夫婦で朝4時から夜の11時頃まで挽いて2石ほどであったという。臼は、竹枠を取りつけて塩と混合した土を突き固め、櫛の歯を打ち込んだ**ドウス**が用いられた。上臼と下臼がかみ合い、歯をねじりながら回転し、穀殻を取って米を外へはじき出した。天川村ではドウス以前に**キウス**が使われていたという。キウスは米が碎けるとよく言う。山（歯）が減りやすかったからなのだろう。減ったらすぐノコで山をこしらえなければならなかった。

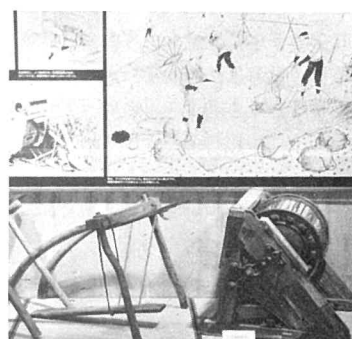
臼挽が終ると米を選別し、俵に入れるとこれで収穫の作業は一往完了する。しかし休む暇を与えず、冬仕事と縄ない、ワラジ作りなど翌年入用な物の準備作業が待ち受けていた。（松崎憲三記）



ドウス



キウス



センバコキ(左)と足踏脱穀機(右)

正月 迎え

— 奈良県の民俗行事 —

12月になると正月準備のせいか、なにかと気ぜわしい気持ちになる。13日を正月始めとかススハライなどと言い、家の中を掃除したり、正月の飾りものを山へ採りにゆくようになる。またこの日は、奉行人のオトコシやオナゴシの入れ替りの日でもあった。

正月になくはならぬ餅は27・28日頃に搗かれることが多く、この頃農村を歩くと早朝から夜遅くまで威勢のいいかけ声と、ペッタン、ペッタンという音が聞かれた。こうして正月の準備を進めるにつれ、正月を迎える気持が昂揚してくるのである。

正月来たら何うれし

お雪みtainママ食べて

碁石のような餅たべて

割木のようなトト食べて

こたつにあたってねんねこしよ

という（『明日香村吏』）俚謡が大和のあちこちで聞かれ

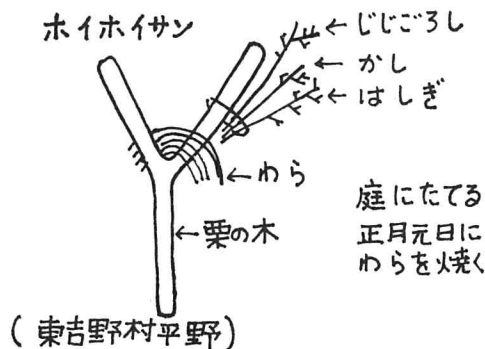
るのは、正月を持ち望むころが大変強かったからである。

大晦日の夜から元旦にかけては、各地でいろいろな行事が行なわれている。奈良県東部の大和高原のフクマルムカエという行事や、東吉野村の旧高見村でのホイホイサンといって家の前庭で藁束に火をつけて、正月さんを迎える行事があった。また歳徳棚を作って、これを祭る家もあった。川上村高原^{たかはら}では、お盆の上にお金をのせておくと、だれかが（たいてい子供であるが）塩をもって来て、盆の上のお金と交換して、塩をのせておくという。むかしの人の感覚には正月にはたしかに何か（正月さま）が来るという意識があるのだろう。

また大晦日から正月にかけては火に関するまつりが多い。先に書いたフクマルムカエやホイホイサンの行事も藁に火をつけるという火のまつりであるが、また桜井市の大神神社の繞道祭もそうである。この行事は、神社で新しく火をおこしてその火でオータイマツを作ると、

附近の村の人々は松のジンの松明や、火縄などもってゆき、オータイマツから火をもらって帰るのである。そして、この火で雑煮を炊いたり、神棚のあかりにしたものである。昭和15年に調査された辻本好孝氏の『和州祭禮記』にこの行事が詳しく書かれているが、下記引用文は特に正月を迎える人々の動きと喜びがよくわかる。

御神火が松大明に移火され、ば、これらの人達がどっと喊声をあげて大松明目がけて殺倒し、われ勝ちにと先陣を争い、揉み合って各自手にせる火縄や小松明に大松明の御神火を移し点じ壮観な光景を



現出、一時社頭は火の海と化するのである。

なかには着物を焦がすものもあろう。また身体に火傷をするものもあろう。それら一切を意に介せず、淨らかな神の火を火よりも早く授からんとして、数千人の連が物凄い御神火移しの先陣争ひを炎の中できり展げるのである。

吉野山の蔵王堂へ、川上村や吉野町の旧国栖村あたりから正月の火をもらいにゆくことがあった。川上村の武木では、村で毎年この火をたばりにゆく人が順番で定っており、当番の人が大晦日に蔵王堂までゆき火をもらって帰村した。帰村する道中は火縄をふりふり歩いて、火を消さぬように苦心をしたという。持って帰った火を村の氏神の前で、用意していた柴に移してトンドをした。この火を各戸の人々がもらって帰り雑煮を炊く種火にしたそうである。今この風習はなくなったという。野迫川村では高野山へ正月の火をもらいに行った。大晦日から元日にかけて非常に重要な時間であって、とりわけこの時に火に関する行事が多かった。正月の火は神聖なものでなければならぬとの信仰があり、むかしから正月を迎えるにあたり、このような神聖な火をどうしても必要としたのである。

(浦西 勉記)

第一回 体験学習講座と民俗講座

実物資料による知識伝達の手段としての展示の限界を補足するという意味で、当館では、体験学習講座(郷土学習室)や、民俗講座(講義室)を開催いたしております。

第一回の体験学習講座は「なわないと俵あみ」、午前10時からと、午後2時から2回で百名余りの参加者がありました。大半は日頃ワラなどを手にしたことがない子供達でしたが、一見なんの役にも立ちそうもないワラを材料にいろいろな物が作れる事への驚き、またそれを自分自身でためした事など子供達にとって充実したひと時だったようです。ワラ仕事を指導していただくために、菟田野町下芳野から、小泉正勝さん、同町稲戸から中村秀吉さんにおいて願っていろいろ指導していただきました。

第一回の民俗講座は「大和のしごととくらし」という題で、奈良教育大学の林先生にお話をいただきました。民俗学や民俗資料とは何か、昔の人々の仕事とくらしを知る事によってより良い私共の未来を考えようというお話でした。講義のあと林先生の先導で、あらかじめ来ていただいた古老の方々(三宅町小柳の広岡平治郎さん、吉野郡天川村塩野の松葉与平さん、都祁村白石の福井ゆきゑさん)に展

示室内の民具を見ながら、参加者全員で昔の話を聞かせていただきました。実物資料を前にして昔実際にそれを使用した方々から直接話を聞いたことは実に貴重なことだなあと、参加者全員が感じた次第です。今後もこの様な講座などのあり方について種々研究し、より充実した企画にしたいと考えておりますので多くの方々の参加をお願いいたします。なお第二回目の体験学習講座は12月22日、お正月をまえにして「シメナワ作りを」おこないました。講師として曾爾村伊賀見から坂井肇氏他2名の方々に来ていただきました。



民俗講座
「大和のしごととくらし」



体験学習講座
「なわないと」

近畿民俗学会

第四回研究大会開催

去る1月11日・12日の両日、当館を会場として、近畿民俗学会の第4回研究大会が開催されました。広く近畿一円から、学会員の他一般の方々も含め45名が参加されました。初日の11日は午後2時から当館講義室にて開会挨拶の後、展示室観覧に続いて公開講演「奥吉野の民俗」（講師、奈良教育大学、林宏氏）がありました。2日目は9時30分から総会の後、午後4時まで、密度の高い研究発表と討議が続けられました。

近畿民俗学会、第4回研究大会

主催 近畿民俗学会

後援 奈良県立民俗博物館

大和タイムス社



公開講演中の林宏氏

**** おしらせ ****

民俗博物館の行事予定

- 1月26日 体験学習講座〈杓子づくり〉
- 2月2日 民俗講座〈吉野の木地師〉
- 2月23日 体験学習講座〈ぞうりづくり〉
- 3月2日 民俗講座〈家の神について〉
- 3月9日 体験学習講座〈麻糸づくり〉
- 3月23日 体験学習講座〈むしろ織り〉

※ 体験学習講座（改民俗資料製作実習）は郷土学習室で、民俗講座は2階の講義室で行います。

編集後記

奈良県立民俗博物館が開館し、いよいよ活動をはじめる事になりました。そして今度は民俗博物館だよりの第1号を発刊する事になりました。これは、当館の活動をより多くの方々に知っていただく為の窓口として企画して行きたいと考えております。今後とも紙面をより充実するために頑張りたいと思います。

（大宮記）

寄贈民俗資料分類目録の訂正

先に当博物館より寄贈民俗資料分類目録が刊行されましたが、印刷ミス等により若干誤りがありましたので、お詫びし訂正させていただきます。

- ・37ページ7行目 100ページ34行目、113ページ21行目、小泉久継→小泉久雄
- ・49ページ10行目、50ページ48行目、52ページ57行目、広岡平次郎→広岡平治郎
- ・50ページ48行目、田丹→田舟 三郷町→三宅町
- ・52ページ21行目、落合孝一→落合孝一
- ・71ページ37行目、乾郎繁太→乾繁太郎
- ・83ページ37行目、84ページ52行目 尾上忠昭→尾上忠明
- ・124ページ44行目、薬箱（百簞笥） 1 香芝町孤井→薬箱と百簞笥 2 香芝町孤井
- ・125ページ57行目、吉野町惣上→下市町惣上

● 利用案内

観覧時間 午前9時～午後5時まで

但し入館は午後4時30分まで

休館日 毎週月曜日（その日が祝祭日の場合は翌日）と年末年始

観覧料 大人100円・学生70円・小人50円
20名以上団体割引

交通機関 近鉄郡山駅より奈良交通バスの矢田山町、泉原町、矢田寺前ゆきにて「矢田東山」下車。
国鉄関西本線郡山駅下車、バスセンターまで徒歩10分、奈良交通バスにて「矢田東山」下車。

